

芸術観光学宣言 : 文学研究から芸術観光学へ

著者	平居 謙
著者所属(日)	平安女学院大学国際観光学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	8
ページ	30-36
発行年	2008-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001260/

芸術観光学宣言

— 文学研究から芸術観光学へ —

平居 謙

- 1 芸術観光学という仮構
- 2 芸術観光学の本質
- 3 芸術観光学の目的
- 4 芸術観光学の方法・応用
- 5 最後に

1 「芸術観光学」という仮構

1-1

例えば「芸術観光学」という、まだ存在しないジャンルを仮構しよう。この場合「観光芸術学」ではなく「芸術観光学」であることが大切なことだ。「観光に関する芸術・観光と関わる芸術」を研究対象とするのなら「観光芸術学」という名称が成立するだろうし、この視点も実に興味深い。現に「京都を描く文学」「東京文学散歩」といった文学へのアプローチは多くなされているし、「地名」で東ねてみたり実際に現地を歩いてみたりすることでそれまで見えなかったものが見えてくるということは確実にあるのだろう。しかしそれ以上に今は「芸術観光学」という「語順」が、私を捉えて離すことをしない。

1-2

私自身のことで言えば、1986年からの10年間は、大正末期詩壇にセンセーションを巻き起こしたダダ詩人高橋新吉に関する研究を行い、『高橋新吉研究』（1993年思潮社刊）として成果をまとめた。その後の10年間は、＜最現在詩場＝磁場＞プロデュースに重点を移している。まだ誰にも評価されることのなかった若手詩人たちを集めたアンソロジー『脳天パラダイスシリーズ』、『京都ダイナマイト！』。あるいは全国の詩人たちの同人雑誌即売会「ポエムバザール1～7」の開催。その他各種のワークショップ指揮やポエトリーリーディングへの参加。詩誌編集・出版指導・装丁・レイアウト。私の中で言えば、「研究」もこれらの活動も分け隔てのないことであるが、前者には「研究」という名称が与えられ、1987年に没した詩人に対するいち早い反応として概ね良好な感触の中で迎えられた。しかし、その後のプロデュース活動に関しては名称すらなくそれを行う「私」は「文学研究者」という観点から言えば、イベント等の活動を「手広く行う」雑種犬でしかない。

1-3

しかし、ここに「芸術観光学」という架空のキーワードを放り込んでみると、面白いようにすべての活動が、ひとつに結びついてくる。即ち、芸術を観光すること。「対象の持つ魅力を嗅ぎ分け、接近し、自分の物とする。アレンジし、特色を出し、売り出し方を考える」という行為。「文学研究」という発想を外して「芸術観光学」という名称を与えれば、新しい世界が拓ける。本稿では以下、未だ誕生していない「芸術観光学」の全体構想を提案する。また大学教育、特に本学国際観光学部における教育への応用の可能性を探ってみたい。

2 芸術観光学の本質

2-1 芸術観光学の本質

芸術観光学は、芸術を観光する。あたかも訪れた観光地の空気そのものを楽しむように、対象を遊ぶ。本来の意味においては「鑑賞」に近いが、現在あるところの「鑑賞」が例えば「文芸学」^(註)の領域において批評・研究より一段低く位置付けられていることを考えると、誤解を防ぐために、「鑑賞と相似的」とのイメージは払拭しておく必要がある。また「観察—仮説・問題設定—分析—解決法模索」という一連の流れを持ついわゆる「論」の発想と根本的に異なるのは、「論」においては、分析それ自体が自己目的化されるのに対して、芸術観光学においては「論」自体が表面的には隠されることだ。論によって確信された対象の本質を、専門用語と蛸壺の発想とを完全に抹殺した後に、一般に向けて広く発信する。その形態は、おおよそ従来の「学」のイメージからはほど遠いので、余程注意深く観察しない限りそれが「学」の成果と見なされないだろう。そして、それこそが重要な意味を持つ。観光が経済学を取り入れ文化人類学を含み込み地理学とリンクし「観光学」という不定形のを成立させようと腐心しているのとは全く異なった次元において、文芸学或いは文学研究は「観光」の愉悅的発想と衝撃の出会いを体験し、「芸術観光学」へと変貌を遂げる。また、同様に、文芸以外の芸術に関する研究も同じ可能性を秘めている。芸術観光学者は、研究・批評を超えてより高次に成果を展開する。関心は同業の専門家の評価ではなく、創作の現場・実験現場により強い関心を寄せる最先端のプロデューサーである。

2-2 芸術観光学の対象と効用

芸術観光学は初期の段階においては**観光を学ぶ学生**が、幅広い人間性と瑞々しい感性とを身に付けるための補助的役割を担うだろう。直接的には役に立たない「芸術」作品の前に佇むことは、実務や現実の「観光」とはかけ離れた**純粹心象風景に連行する**。必ずしも深く考えなくてもやり過ぎせる事柄—形而上的思考—への門前に学生を立たせることができる。しかしこれは副次的或いは逆説的に「現実感覚を鋭利にすること」に大きく貢献する。非日常的な表現を絶えず行っていると、逆に現実的感覚が研ぎ澄まされてくるのと同様に、現実的世界を離脱した<非日常的芸術世界>に不断に触れ、日常に還元不可能な感覚を少しでも多く身に付けてゆくと、日常的感性が逆に練磨される。これは一見不可解であると思われるが、「地盤」「対比」ということに思い至ると、不思議でも何でもないことがわかる。非日常的、超常的表現を行うためには、その「**地盤**」としての**現実**が強く認識されていなければならない。表現者は**日常⇄非日常の「対比」**を常に強いられるからである。マイナスの表現を常に続けていると裏側としてのプラス表現が容易に理解できるわけだ。直接主体的に表現せず、読者・受容者として作品に触れている場合でも、同様の効用がある。これは、<非日常>である<旅>をプロデュースする側は常に、予算・日程などのプラン＝<現実>との戦いであることと少し似ている。

また、当面は観光を学ぶ学生に限られてくるのは名称上の必然であろうけれども、この学としての妥当性・有効性が認知されればまさに現在の「学」としてあらゆる領域における基礎学として成立することは歴史が証明することになるだろう。

2-3 鑑賞・批評・研究と「芸術観光学」

1-1「芸術観光学宣言」で略述した鑑賞・批評・研究と「芸術観光学」との関係について少しく補足しておく必要がある。この関係を明確にしない限り、正統な展開を期待することが出来ないからである。

まず図1は、本来の「鑑賞」と研究の等值的関係を示す。緻密な読みと的確な表現に支えられた「鑑賞」は本来的には「論考」と同等の重みを持つべきものである。

図1

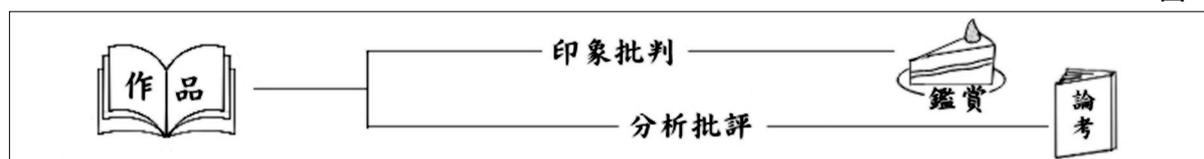
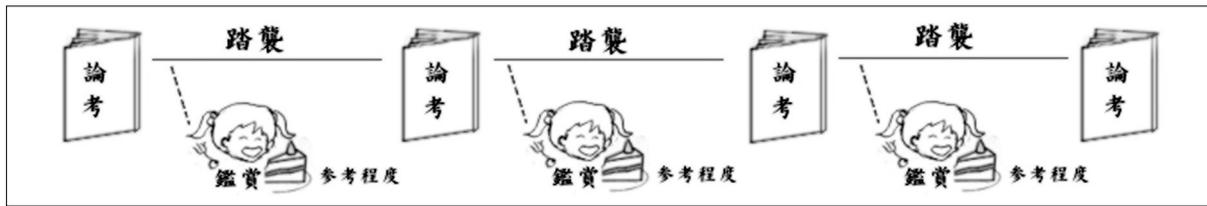


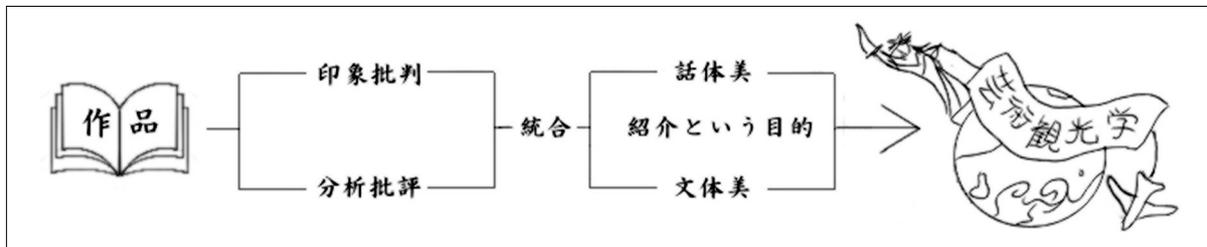
図2



ところが、現実的には、図2に示すように、鑑賞の置かれた位置は限りなく軽い。

文芸学における現実には、「鑑賞」は「研究論文」作成における参考程度であり、場合によっては「学術的ではない」という理由によって無視することも可能である。つまりは先行する学術論文からの参照がもっとも優先される。これは、鑑賞への軽視であると同時に、「鑑賞」自体が一定レベルを満たしていないという可能性をも強く示す。「鑑賞」と銘打ったものでずば抜けてすぐれた業績が少ないことも理由のひとつである。したがって、本稿では、本質的には類似性を認識しながらも、先述のように、現状としての「鑑賞」と「芸術観光学」との一切の関連性を否定する。

図3



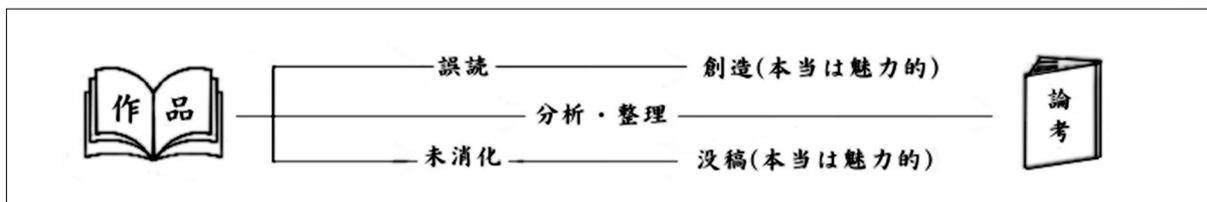
上記図3におけるように、これまで鑑賞・論考という形で二分化され展開してきた二つの形態を止揚する形で、その先に展開するのが本稿でいう芸術観光学である。それは、紙媒体や電子媒体の場合、文体美、つまりは分かり易い文章によって成り立つ一般に開かれたものでなければならず、舞台またはプレゼンテーションのような「発表形態」の場合においては、これも難解な表現を極力抑えた話体美が示されなければならない。そしてその先に「芸術観光学」が成立する。

3 芸術観光学の目的

3-1 思考過程の提示

芸術観光学は、失敗のプロセス自体をも提示する(図4)。というのも、成功した事例よりも、失敗した発想の方がよりよく人間の思想を表わすからだ。

図4



話体美を存分に活用し、これまでの、難解で溶け込みにくい詩に関する批評にささやかな革命を起こした詩誌「Lyric Jungle」(2001年から現在まで12冊刊行中)はなぜ成功したのだったか。その理由としては、例えば座談などにおいても、削除部分を極めて少なくし、普通であれば恥ずかしくて載せられない、あるいは載せる必要がないと認識されるレベルの会話まで取って全面掲載した点を上げることができる。それにより、リアリティーが増すと同時に、誤謬・誤読の中にもまた一縷の可能性があるということを示したからである。また、誤謬・誤読を含む対話がそこに示されてお

り、時系列的にそれが止揚されるプロセスを示すことは、人間の発想そのものが進行し成長するのだということの証明に他ならないので、それに触れる読者が、追体験をする感動が得られるのである。これは、体験の少ない旅行者が行く先々で様々な風物に触れ成長してゆく過程に譬えることができる。

3-2 悦楽感覚の獲得

このことは、**芸術観光学が極めて肉体的**であることも強く関連している。芸術観光学においては、**目的は悦楽感覚を獲得すること**であるため、結論・結果のみが重視されるものではないことは重要な事柄である。一元化された収斂点は見掛け倒しの満足しか与えることはなく、重要なのは思考のプロセスであることを忘れさせてしまう。対象となる作品群の分類を提示することで事足りるのだ。その分類に、問題点を指摘し、何らかの意義を添えることが従来の研究的方法のひとつであったが、この行為こそ、余分なものである。敢えて言えば、研究主体が、どの分類に属するものを嗜好するか、など、より主観的・肉感的に語るだけで充分である。

さらに極論すれば、分類もプロセスさえも、本当は必要がない。**最終的に必要とされるのは原典の選択**であって、その意味では**芸術観光学の最終局面は、究極のアンソロジーの提示・作成**であるといえることができる。それは歴史的には、「百人一首」や渋澤龍彦の諸編や伊藤信吉の編著として現れてくる。観光客にとって、主観で独走するエッセイよりも、客観的なデータのほうが好まれることが多いのと同様である。しかし、時々刻々と作品は生み出され、それがゆえに、新しい成果が求められる。時代が動く以上、芸術観光学の成果も方法も日々更新される必要がある。

4 芸術観光学の方法

4-1 芸術観光学の方法

現在行われている方法で芸術観光学に延用し得るダイナミックな営為をいくつか確認したい。もちろんここに提示するものがすべてではなく、その他さまざまな方法が考え得るけれども、全てに共通するのは、閉塞的でなく、ジャンル外部に向って開かれた視線である。

①映像化

文章作品に感銘を受けそれを映像化する。この行為は、映像作家が日常的に行う営為であり学的営為とは一般には見なされない。しかし芸術観光学的に言えば十分に領域内の営為であるということが出来る。すべての映像作家は、脚本を立体化するという点において芸術観光学者であるといえる。

②演劇化

作品を映像化する代わりに演劇化する。脚本・演出、どこに重点を置いても構わない。脚本家・演出家も映像作家同様、芸術観光学の精神を知る者のひとつである。

③ジャンルのクロスオーバー

同様にすべての表現において同様の置換が成立する。あるひとつのジャンルから別のジャンルへと移動させるエネルギーの総称を本稿では芸術観光学と呼んできたに他ならない。移動エネルギーが蓄積されたところに学が誕生する。しかし、営利上の目的のために例えば他ジャンルとの交流や、あるジャンルの一般大衆化を行うような場合、大いに原ジャンルの長所を失わせることもある。これは、営利上の目的でなくクロスオーバーが行われる場合でも同様の危険性はあるが、ある一定の良識において行われる場合が多い。営利上の目的のために行われる営為は、観光化されることによってある土地の文化に歪みが生じるという「観光」の持つ負の側面と酷似する事態を生じさせる。該当ジャンルを一般化するか否かという問題に関しては、多くの場所で深刻な問題となっていることは周知のとおりである。

④すでにクロスオーバーされたものとの比較

ジャンルをまたがって置き換えられたものとの比較も、芸術観光学の重要な方法である。芸術観光

学ジャンルに限定は存在しない。従って逆に研究主体はジャンル意識を鋭く持つ必要がある。鮮明に違いを意識しながらなおかつそれにとらわれずに獲得する悦楽は非常に高度な感覚である。

⑤朗読

文章作品を朗読することは、前提としてそこに解釈を含む。何者も解釈から自由に朗読をすることは出来ない。だが現在行われている朗読の中には、芸術観光学の名に相応しいものは少ない。理論と現実とはどんな場合にも完全に一致することはない。

⑥レイアウト論

1冊の書物を前に、国文学者あるいは文芸学者がなしえたのは、内容の分析や筋の確認といった形式とは無縁の分析であった。むしろ彼らはストイックにそれを守ってきたわけだが、一旦その籠が外れれば、あとは芸術観光学の独壇場である。

⑦装本論

さらに目を外部へと移動させる。レイアウトのみならず、本の造りそのものに対する論が、芸術観光学においては成立が可能である。内容と装本とのバトルを対象とした、ダイナミックな考察が展開される。

4-2 教育への応用

ここで「芸術観光学」の、教育への応用の一例を示しておきたい。4-1に挙げた7つの例も教育現場で用いることが可能であるが、より簡易な愉悅の方法がある。繰り返しておく「芸術観光学」の目的は、対象を受容し、考察分析した上で、愉悅を獲得することであるから発表の形態も、一元化された「結論」を必要とはしない。そのため、調査対象は非常に幅が広がり、従来議論の遡上に挙げにくかったものも、対象として扱いやすくなる。

①台詞のピックアップ・紹介

魅力的だがどう「論じて」よいのか皆目見当のつかなかった対象も、「芸術観光学」的方法に拠れば、気安くプレゼンテーションの題材になる。聴衆や読者が、興味を持つ形で例えば登場人物の台詞をピックアップして紹介する、などの形態が可能である。また、他にも、作品に流れるオノマトペを楽しむなどの方法がある。これは漫画などを対象とした場合、特に有効である。

②作品のその後の創造

想像に過ぎない、と従来型の「文芸学」であれば即座に否定された「書き継ぎ」の手法も、ひとつの重要な方法となる。

③リメイク・自己版

原作を自分なりに書き換えることも、精緻な考察や判断の上になされるならば大きな意味を持ってくる。リメイク版と原作を深く検討することで切り口が見える。

④それに合わせて聞きたい音楽の紹介など

DJのように、ある小説に合わせて聞きたい音楽を選ぶ、ということも、「芸術観光学」としては大いに認めるものである。

⑤挿絵論

作品に関連して考察するべきであるにもかかわらず、従来、本質的に練り上げられたものの少ない「挿絵」に関する考察・紹介も、興味深い対象である。

⑥タイトル論

作品内容を横に置いたタイトル論などは、ほとんど「文芸学」においては意味をなさないが、「芸術観光学」においては、もっとも刺激的な学的対象のひとつである。

⑦経済論・流通論

その作品がどれだけ出回り、流通したかは、「文芸学」においては問題外とされるが、よりダイナ

ミックな発想を取り入れる「芸術観光学」においては歓迎されるべきである。経済・流通の視線を入れるとき、まったく次元の異なる問題も生じる。

⑧座談・雑談

座談や雑談などは、結論へのプロセスとして容認されてきたが、それ自体が見解の宝庫であると考えれば、ひとつの最終形態と見なすことも出来る。

⑨同テーマ作品を作る

作者と読者を等価に置く発想は文芸学には皆無であるが、読者が作者と同じテーマで作品を書いたとき、そこに大きな切り口が開く。

⑩問うこと

対象とした作品の中から、面白い部分をピックアップして問いかけの形に仕上げる。問うこともまた「芸術観光学」としては最大の愉悅のひとつである。

5 最後に

2007年10月31日、本学・平安女学院MホールにおいてFD会議が持たれた。課題のひとつとして、国際観光学部の新しい方針である「ジェネリックスキル演習構想」があった。この「ジェネリックスキル演習」については、いずれプロジェクトチームとして、その理念・方法を中間報告をも含めて別稿をたてて述べる予定であるが、簡略に言えば単なる知識の集積ではなく「人間力」を学生自身の手によって獲得させるための教育であり、教員側から言えば学生に主体的に考えさせるため、口を挟まずに辛抱強く見守り、必要に応じて適切なアドバイスを出すことの方法的確立と実践に他ならないわけである。私自身この「ジェネリックスキル演習」の担当予定者でもあり、プロジェクトチームの責任メンバーの一員でもあったため、数ヶ月の企画が全学的にどのような反応を得るか、強い緊張の中で時を過ごした。プレゼンテーション終了後、＜カリキュラムを見る限りにおいては、「スキル」にやや偏重しているように見受けられ、**観光にも必要不可欠であるはずの「感性」に関わる部分が見えてこない**＞旨の質問が、会場よりなされた。本学は教育理念として「感性」を重視しており、私自身の実践&研究領域が、本稿でも述べたとおり、感性に強く関わる「詩」という領域で、また担当科目もそれに強く関連するため、切実な問題提起としてこれを捕らえた。そして「感性」重視の教育を、現存するカリキュラムの中でどのように展開することが出来るかを構想しようと考えた。その結果、個人的に出てきたのがジェネリックスキル補佐学としての「芸術観光学」の構想であった。「観光」の名を冠した理由は、本論でも述べたとおり、本学部における国際観光学部の学生を主な対象とするという理由と、対象を楽しみ対象から育つという「観光」の理念と方法を取り入れるためというふたつの意味がある。

ジェネリックスキル演習においては、他人の心を知り、協調性を育て、実際にチームとして動くことの出来る＜人間力＞を獲得させる重要なプロジェクトである。しかし、冒頭で述べた「感性」の部分に関しては、本稿中でも述べたように、大いに「不定形」で「創造的」な部分を探索・体験することによって初めて獲得される。ジェネリックスキル演習は、プログラムのどこまでカバーしきくことは出来ないし、その目的から外れる。そのため、「表現」「感性」教育に関わる教員として何が出来るかを考察しようとした。現在のカリキュラムの中に「芸術観光学」という名称は全く存在せず、それ以前に、本稿冒頭で述べたように現在「芸術観光学」という名称は学的世界のどこを探しても見当たらない。しかし、これを契機として、従来の「国文学」「文芸学」から派生した新たな領域への模索を行うための一つの布石として本稿を書いた。

註

1. 本文では随所に「文芸学」という表現を使ったが、これは私が拠る「日本文芸学」のことで、広義には「国文学」と理解することも可能であり、さらには、「学」の一般的方向・方法と捕らえて頂いて構わない。
2. 本文の図表作成に関しては、「STUDIO FLACTAL」にご協力いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

Art Tourism

Ken HIRAI

Imagine a research genre “Art Tourism”

This differs from traditional science of art and literary researches. It does not assume analysis and consideration of the work rather the objective is to appreciate the art through its splendor. This resembles art appreciation but also encompasses film, caricature, novel, etc. Naturally this study includes traditional views for appreciating art.

「芸術観光学」という研究ジャンルを仮構しよう。ここでいう「芸術観光学」は、伝統的な芸術学や文学研究とは異なるものである。それは、分析や考察、証明といったものを直接の目的とはしない。分析や考察、証明の上に立った「すばらしい世界の紹介」が最終目標である。その点で「芸術観光学」は「鑑賞」とよく似ている。しかし芸術観光学はもっとさまざまな形をとることがある。例えば「文学研究」は、その成果を論文の形以外で表すことはできない。しかし「芸術観光学」の成果は多種多様である。映画化、漫画化、小説化……また、もちろん従来通りの「批評」「論考」も可能だ。その点において、「芸術観光学」は観光そのものに酷似しているともいえる。「芸術観光学」はまだ何も確立されていないが今後、順次方法論を確立してゆくことで、今までにない五感全てを巻き込んだ学問ジャンルが成立するであろう。